兵庫史を歩く No.24　（2022.3.19）

三木合戦と金物の町

三木合戦（1578.3～1580.1）とは？

三木城の築城時期ははっきりしていないが、守護赤松政則の重臣であった別所則治によって築城されたと伝えられている。以後東播磨一帯を支配する別所氏代々の居城となった。

戦国時代の元亀元年（1570）五代目城主別所長治（1558～1580）は 13 才で父のあとを継いだ。父親が織田軍に属していたことから、当然ながらそれを引き継いだ。

天正 5 年（1577）織田信長は西国の雄毛利氏討伐に着手し、羽柴秀吉がその責任者として播磨に侵攻してきた。秀吉はまたたく間に播磨を平定し、翌年 3 月加古川城において播磨の城主を集め、西国攻めの評定をおこなった。ところがこの加古川評定の後、長治は突如離反し、毛利方に寝返った。これをみた東播磨の諸勢力がこぞって別所長治に同調した。秀吉の再三の要請にも意を翻さなかったので、秀吉は三木城攻略を決意した。

三木城を包囲した秀吉軍は、その数 3 万ともいわれる大軍であったが、三木城の堅牢さを知っている秀吉は無理をしなかった。採用した作戦は城を包囲しての兵糧攻めであった。三木城を取り囲む格好で 30 を越える付城（敵城を攻めるために築いた城）を構築し、その間を土塁で繋ぐことで徹底して兵糧の三木城への搬入を阻止する作戦をとった。凄絶な兵糧攻めであり、毛利からの兵糧搬入は困難であった。これは「三木の干殺し」と呼ばれるほど徹底したものであった。

2 年ちかくの籠城で食料も底をつき、ついに別所長治は長治以下一族の命と引き換えに、城兵と領民の助命を嘆願して開城、長治は妻子、一族とともに自刃し、戦いは終わった。時に天正 8 年（1580）1 月 17 日、長治 23 才であった。

「今はただ　うらみもあらじ　諸人の

いのちにかはる　我身とおもへば」

なぜ別所長治は信長に反旗を翻したのか？

古来いろいろな説が唱えられてきた。

①加古川評定説

地元に伝えられている軍記「別所記」によれば、加古川城での評定で秀吉との対立を招いたことが原因とし、これがほぼ定説とされている。

しかし、この評定に長治自身は参加せず、後見人の一人で、しかも毛利氏に近いとされる叔父の別所吉親を派遣した本意はどうであったのか？（もう一人の後見人別所重棟は織田に近い）

②もともと毛利氏と交流のあった別所氏が、所領を維持するために毛利氏を選んだとする説

③播磨国内には浄土真宗の門徒が多く、石山本願寺と敵対する織田とは立場を異にする説

④赤松氏の一族という名門意識が成り上り者の秀吉を見くびったという説

⑤織田軍による上月城の虐殺（城主の首だけでなく、城内にいた女性や子供 200 人余を磔にした）への義憤が原因とする説

(1)「淡河弾正忠定範戦死之址」碑

三木城の危機のため毛利方は天正 7 年（1579）9 月、城内に兵糧を運び入れようとした。いわゆる平田・大村の合戦である。この時城内からも淡河弾正忠定範らが打って出て、秀吉軍と戦うが、圧倒的な戦力差のため追い詰められ、ついに自害した。

彼はもともと淡河城主で、知恵と勇気を併せ持った武将として知られており、秀長軍と戦った時、城内から馬数十頭を放ち、敵を蹴散らすという奇抜な戦法で勝利している。「播磨の楠木正成」と言われることもある。

(2) 本要寺

天正 8 年（1580）1 月三木城が落ちると、秀吉は平井山本陣からこの寺の本堂に移り、別所長治の首実検をし、その後の戦後処理の場とした。

秀吉は戦火から逃れた領民たちを呼び戻し三木の復興を図るために、地子免除（税を免除）した(※)。このことは後の三木の発展に大きく寄与し、三木を鍛冶のまちとして現在につながっている。

(※)なぜ三木を地子免除したか？

秀吉は三木の堅固な地勢が気に入り、今後の西国攻めの拠点にしようと考えたからである。しかし、軍師黒田官兵衛の進言により結局は海に近い姫路を拠点とした。

・「義民碑と宝蔵」

秀吉により与えられた地子免除の特権は、徳川四代将軍家綱の時に取り消しの危機にたたされた。その時死罪覚悟で直訴して特権継続を認めさせた 2 人の義民を讃える碑と秀吉の制札を納めた宝蔵がある。毎年 7 月 18 日には「夏の義民祭」が行われる。（冬の義民祭は本長寺で 12 月 8 日に行われる。）

(3) 雲龍寺

もともとは三木城内の一角にあったが、当時の建物は戦火で焼失した。長治は自刃の際、雲龍寺住職に愛用の金天目の茶碗を贈り、後事を託した。

秀吉の兵糧攻めによる飢えから、籠城した兵士が壁土の藁をも食べたとの言い伝えから毎年 1 月 17 日の長治の命日に、藁に見立てた「うどん」が振舞われる。

・「首塚」

長治の首は安土城の信長の元に送られ
首実検の後、住職が持ち帰り埋葬した。
長治夫妻の首塚がある。

・「石垣」

首塚の隣にある石垣はなんでもないように
置いてあるが、これは実は三木城の
外堀に使われていたものとか。

・「辞世碑（旧碑）」

もともと上の丸公園の天守台に設置されていたが、昭和 17 年に新しい碑が
作られたために、ここへ移された。

(4) 三木市立みき歴史資料館

三木城二の丸跡にあった旧三木市立図書館を改装し平成 28 年 5 月 5 日開館した。三木の歴史を六つの時代に分けて紹介している。「三木城の歴史」の項目では、三木合戦を中心として、三木城の築城から廃城までを展示している。また法界寺にある「三木合戦軍図」の模写が展示されている。

・「国史跡　三木城二の丸遺跡と備前焼大甕群」の説明版

資料館の横に説明版が立っている。このあたりの場所から 21 個の備前焼の大甕が埋没した穴から発掘された。これに炭化した麦粒がついていたことから、食料貯蔵庫であったと考えられる。

(5) 上の丸公園（本丸跡）

残念ながら現在の様子からは往時の城を想像するのはとても難しいが、三木城は東西約 550m、南北約 450mの規模で、南側は山や谷、他の三方は崖に囲まれたまさに堅牢で巨大な要塞であった。

・「別所長治公像」・・・・・騎馬像

・「辞世の歌碑」・・・・・天守跡にある

・「かんかん井戸」・・・・・石を投げ込むと

「カンカン」と音がすることから、この名がついた。この井戸から長治愛用の鐙（あぶみ）が出土し、雲龍寺に保存されている。一説によるとこの井戸は城外への抜け道であったとか。

・「三木城想像図」「別所家一族の辞世歌碑」「三木城包囲の秀吉軍武将配置図」

三木の金物

三木といえば金物の町として有名である。

古く「続日本紀」によれは、美囊郡に渡来系製鉄技術集団と考えられる韓鍛冶の名が記載されており中国山地の豊富な鉱山資源を活用し、早くから金物生産を行っていた。これに在来の大和鍛冶の技術が融合したのが発祥と考えられる。

三木合戦後、町の復興に集まった大工職人は、地子免除もあり、延享元年（1744）には140 軒になっていた。これら木工職人に道具を提供するために金物生産が本格化したと考えられる。江戸時代には鍛冶組合が組織されて、販路は大坂、名古屋、江戸までに及んで特産品として知られるようになった。

鋸・鉋・鑿・鏝・小刀などの大工道具が中心で、「播州三木打刃物」として国の伝統的工芸品に指定されている。

(1) 金物神社

昭和 10 年（1935）に金物業者全体の守護神として創建された。

毎月第一日曜日には、ふいごを使い古式に則った古式鍛錬の実演が行われる。

(2) 三木市立金物資料館

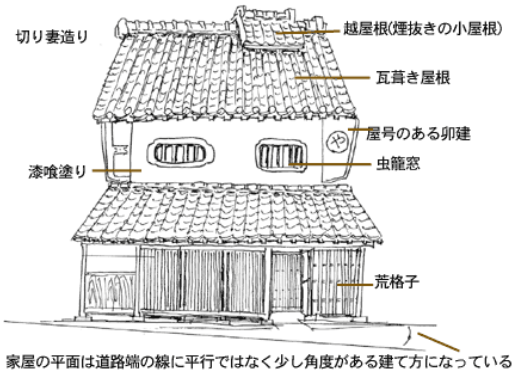
昭和 51 年（1976）に校倉造風の資料館が金物神社の境内に設立され、三木金物の伝統的技法や「鍛冶用具と製品」（国登録有形民俗文化財）など貴重な資料を保存・展示している。

入口の前に文部省唱歌で名高い「村のかじや」の記念碑があり、前を横切るとセンサーでメロディーが奏でられる。

湯の山街道

　三木合戦の折に兵糧搬入など作戦行動のために有馬から三木までの道が整備され、湯の山街道として知られるようになった。合戦で傷ついた兵を癒すために秀吉は有馬の湯を運ばせて野風呂を作って療養させたと伝えられる。
　播磨と摂津を結ぶ山間部のこの街道は、江戸時代には山陽道の脇往還として、大きな陣屋も存在し、参勤交代の大名に利用されたり、有馬温泉を行き来する湯治客にも使われた。この街道筋には今でも三木を代表する金物問屋や金物製造業者が軒を連ね、中二階建てで切り妻造りの商家の建物も多く残っている。また宿場町の特徴である枡形が昔のままであり、当時の面影を色濃く残している。

（古い町屋の特徴）



卯健（うだつ）・・・・・もともと防火用であるが、
　　装飾や屋号・商標入りで看板になっているのが三木の特徴

漆喰塗り・・・・・　二階部分を漆喰塗りして防火・防水・防腐をかねた重厚な造りで一階の木質部の構造との対比が美しい三木の古い建築様式

越屋根・・・・・　大屋根に煙抜きの小屋根を付けた古い様式の屋根
　　三木には数軒残るのみ

舟板の壁・・・・　明治中期まで美嚢川舟運に使われ、廃船になった舟板を腰壁に利用。
　　市内に数軒見られる

古い町屋は切り妻屋根間口が広く、かつその間口は道路に平行ではなく、少し角度がある。

（1）玉置家住宅

　文政９年（1826）上州館林藩（当時館林藩の飛び地領となっていた）が財政の立て直しを図るために切手会所（今でいう銀行）として建てられたのがはじまりで、国の登録有形文化財となっている。
　明治８年（1875）玉置家の住宅となり、以後に離れ座敷や渡り廊下など当時の匠技が施された建物が建てられた。

（2）戎神社

西宮神社から勧請されて創建された神社であるが、創建年は不明であり、また当初は別の場所にあったが、明治 11 年（1878）に現在の場所に移築された。

「大塚のえべっさん」と呼ばれ、親しまれている。

（3）子午線塔時計台

平成 14 年（2002）経緯度の決定基準を旧来の「日本測地系」から国際基準の「世界測地系」に変更した。これにより子午線は約 250m東へ移った。そこで新しい測地系による日本標準時子午線（東経 135 度）が通る市内初の建物として時計台が民間企業により建てられた。

この時計台は高さ 12mの木造瓦葺き 2 層で、四方の時計は電波で動く。柱は欅、内部は桧を使っており、下層の壁は寺や城で使われる「鎧壁」という伝統的な工法を用いた。夜間はライトアップされる。

（追記）三木市の名前の由来

神功皇后が三韓征伐の途次、「君が峰」で休まれた時に土地の者がつぼに入れた酒を献上したことから、御酒（みき）、美つぼ（みつぼ）と呼んだのが始まりで御酒→三木、美つぼ→美嚢に転じたとか。

（次回予告）　　2022.4.21

兵庫史を歩く No.25　異人館は北野だけではないよ！

旧ｼﾞｪｰﾑｽ邸～井植記念館～旧ｸﾞｯｹﾝﾊｲﾑ邸